

「教師」という専門職のやりがい」をどう伝えるか

鳴門教育大学 阿形 恒秀

- ◆平成 25 (2013) の 12 月に、私は、母校の高校におけるキャリア教育の取組の中で、将来、教員になることを考えている高校生を対象に、「教師」という専門職のやりがい」の演題で出前授業を行いました。
- ◆その後、受講された生徒さんたちから、感想と共にいくつかの質問をいただきました。
- ◆いずれの質問からも、「教師の難しさ・苦しさ」と「教師の喜び・幸せ」について、高校生たちが本気で聴きたいと思っていることが、ひしひしと伝わってきました。
- ◆それで、私も、時間をかけて本気で回答を考えてまとめました。
- ◆教員採用試験で、皆さんが、自分の気持ちを込めた言葉で、教職への想いをアピールする際の参考にしていただければと思います。

Q	教師という仕事はどういうものか？
A	ある同僚が言っていた次の言葉が、言い得て妙だなと、心に残っています。「八百屋さんは野菜を扱う仕事、魚屋さんは魚を扱う仕事、じゃあ、教師は？と言うと、ぼくは、人を扱う仕事だと思っています。」自らの人間性を拠り所にして、人（児童生徒）にかかわり、人の成長を支援するのが教師の仕事だと私も思います。
Q	学問を教えること以外に生徒に何をしてあげるのが教師の仕事なのか？
A	少し固い言い方をすると、教師の指導とは、教科指導と生徒指導で成り立っています。教科指導は「学問を教えること」ですが、私の専門でもある生徒指導は、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高める」教育活動であると定義されています。別の言い方をすれば、生徒を褒め、叱り、認め、励まし、信じることを通じて、「一人ひとりの生徒の豊かな自己実現を支援すること」です。教科指導と生徒指導は、いずれも教育における大切な営みです。
Q	勉強を教えるだけの教師にはなりたくないけれども、人の感情を感じとるのは得意ではないので迷っているが…？
A	たとえば臨床心理士（カウンセラー）などは、相手の気持ちを理解する共感能力が不可欠な専門職ですが、そのような資質・能力も、臨床心理学や心理療法についての勉強やトレーニングを重ねる中で深めていくものです。私も、若い頃は対人緊張が強いほうで、教師になりたての時期は「自分にはこの職は向いていないのでは…」と思うときもありましたが、経験を重ねる中で、自分なりのスタンスを見出すことができました。大丈夫ですよ。
Q	教師と他の仕事との違いは？
A	営利を主要な目的とする企業経営においては、何よりも「現在の顧客満足」が優先されるのではないかと思います。たとえどんなに「老舗」としてのプライドを持っていても、過去にとられて現在の顧客のニーズからずれていくと経営は成り立たないでしょうし、たとえどんなに「将来性がある」と夢を持っていても、今売れなければやはり経営は成り立たないでしょう。したがって、利潤の追求を目的とする仕事の顧客は、「現在、縁のある人々」ということになります。けれども、教育の場合は、「現在、縁のある人々」だけでなく、「過去に縁のあった人々」「未来に縁を持つであろう人々」も大切な顧客であると私は考えています。言い換えれば、「現在の人々」のニーズに応えることだけではなく、「過去の人々」の願いを受け継ぐこと、「未来の人々」に恥じないような人材を育てていくことも、教師の大切な役割であり、そこが他の仕事との違いではないかと私は思っています。

Q 生徒に対してどういう指導をしていくことが重要なのか？

A 「教育」とは“教（教える）”と“育（育てる・育つ）”の二文字からなっていますね。教師が一定の目標や理想像を持って指導する「教」は重要ですが、一方で、教師の考える鑄型に流し込むのではなく、生徒なりの育ちを大切に「育」も重要ではないかと思えます。「決して生徒は画家にとってのキャンパスでもなければ、彫刻家にとっての粘土でも木でも石でもありません。もし彫刻家が彫像をつくるようなつもりでいると、本来自分より偉大になるはずの存在を、自分の水準の作品につくりかえてしまうことになってしまいます。だから、先生よりもっと偉大な人物が生徒の未来の中にいるかもしれないということをよく認識することが大切です。教育者が子どもを自分と同じようなものにしようとする考えは、まったく切り捨てなければならぬのです。」これは、シュタイナー教育の考え方ですが、私が高校2年のときに担任をしていただいた日本史の先生（この先生の授業は、毎時間、私たちの知的好奇心が動くような問いかけを提示される、今で言う“問題解決”型の授業でした）がおっしゃっていた、「教壇に立ったときの、何かを学ぼうとする生徒の皆さんの眩しいまなざしが、私を、精一杯、授業に向かわせる」という言葉に表れている“教育者の誠実”にも通じているように思います。

Q 教師と生徒の関係について、大切な点、気をつけなければいけない点は？

A クールな眼差しとホットな眼差しの両方を大切にすることではないかと思えます。たとえば科学的な研究において、顕微鏡で何かを観察する場合、観察者は対象に対する主観（個人的な感情など）をできるだけ排除し、客観的に見るのが求められます。このように、科学的なものの見方とは、観察者と対象の関係性を切断することによって成り立つものです。けれども、教育とは教師と生徒の関係性の中で展開されるものですから、観察者（教師）と対象（生徒）の間に、一定の感情の交流がある「ホットな関係」が不可欠です。と同時に、教師は自分の中に、自分と生徒とのかかわりのようすを冷静に眺めている“もう一人の自分”を持つ「クールな関係」も必要となります。このような「関与しながらの観察」（精神医学者サリヴァンの言葉）という姿勢が、「科学的なものの見方」とは異なる「臨床的なものの見方」の大きな特徴です。ちなみに、このような問題に関心がおありでしたら、哲学書なのでやや難解ですが、岩波新書の『臨床の知とは何か』（中村雄二郎）がおすすめです。

Q 生徒とのやりとりは楽しいものなのか？

A 私は3年間、学校現場を離れて、教育委員会で教育行政に携わったことがありますが、自分の業務の重要性についての自負は持っていたものの、どこかに少し満たされない気持ちがありました。生徒とのやりとりは、いつもうまく展開するわけではなく、すれ違いや行き違いももちろんありましたが、そんなことも含めて、やはり、教師にとっては生徒とのやりとりがいちばん心が動くものであったように思います。

Q 生徒とかがかかっていく際の、教師の精神的な在り方は？

A 二人がペアになって、一方の人が目を閉じて後ろに倒れ、もう一人の人が支えるという実習があります。当然のことながら、支える役割の人がぐらついたり（身体の動揺）悲鳴をあげたり（精神の動揺）するようでは、倒れ役の方は安心して身を委ねることができません。教育だけではなく、「他者を支える」ことを目的とする専門職すべてに共通することだと思いますが、“援助者の安定”は、とても重要なポイントだと思います。もっとも、私自身も、心が揺れ動くことはしばしばありますが、自分が教師という役割を引き受けているうえでは、自分の揺れをある程度コントロールすることを覚えましたし、支えきれない時は無理をしない（無理をすると共倒れになってしまう…）、あるいは同僚の協力を得るなどして対処してきました。

Q	生徒の心を、初めに、どう引きつけるのか？
A	漫才の“つかみ”、落語の“まくら”ということとも関係することかもしれませんね。私の場合は、集中セミナーを受けていただいた皆さんはお分かりのように、たぶん、「話術」という点では決して巧みなほうではないと思います。ですので、意図的に“つかみ”や“まくら”を考えたことはほとんどありませんでしたが、自分の話しが「理屈」「理詰め」「建て前」「他人事」になってしまうことにはいつも敏感に気を配り、ものごとのリアリティを大切にすることを心がけてきたように思います。
Q	児童生徒のやる気を引き出すための接し方は？
A	一般的な教育のイメージは「よく知っている者（教師）が良く知らない者（生徒）をリードする」というものであるかもしれませんね。しかし、「児童生徒のやる気」を考える場合は、リードし過ぎることがマイナスに働くこともあるように思います。「児童生徒のやる気」を「自ら伸びようとする力」と読み替えるならば、「可能性を信頼して待つ」ということが大切であるように思います。動物調教モデルではなく、植物育成モデルですね。成長が遅いからと焦って、無理に芽を引っ張ったりしたら、ちぎれてしまいますものね。ただし、「待つ」とこと「放置する」ことは別物です。ときには水を撒き、肥料を添え、あとは成長を信じて時を待つ「見守る」存在が傍に居ることが、成長には大きな意味を持っていると思います。
Q	生徒を理解するために必要なことは？ 子どもを心理面で支えるということとは？
A	友だちのこと、家族のこと、先生のこと、クラスのこと、クラブのこと、進路のこと、友情、初恋、進学、就職、自立…。大人はしばしば、自分が子どもから大人になる過程で直面したさまざまな問題、苦悩や葛藤を忘れてしまいがちです。でも、「大人になる」ということは、何らかの危機を伴い、大きなエネルギーを要する、難しく大切な作業です。そのようなプロセスの真っ只中にいる子どもたちへのリスペクトを忘れないこと、それが生徒を理解するうえでのいちばんの鍵だと思います。皆さんも、小学校・中学校、そして今、高校生として、考え、感じ、揺れ、探している心の在り様を、いつまでも忘れないでいて欲しいと思います。そして、大人（教師）になっても、かつては自分も持っていた「子どもの心」を思い出して、「大人の知恵」を添えて子どもと向かい合うことが、子どもを支えることにつながると思います。
Q	不登校の生徒についてどう思うか？
A	アオムシがチョウになるには、サナギの時期を経ることが必要ですね。サナギの時期というのは、殻の中で、動かずに、エネルギーを貯め時を待つ時期ですね。さらに、サナギがチョウになるには、一定期間の寒さを過ごすことが必要だそうで、秋の終わりからヌクヌクと暖めると、サナギのまま死んでしまうそうです。ちなみに、アサガオが夜明けに咲くためには、光のない夜の時間が不可欠だそうで、光をあてっぱなしにすると咲かないそうです。ピンチのときこそ、大きく生まれ変わるチャンス、そんな眼差しで、不登校の生徒たちを見ることが大切だと私は思っています。
Q	子どもの気持ちにどう対処すればよいのか？
A	先にも述べましたが、かつては自分も持っていた「子どもの心」を思い出して、あたかも手のひらと手のひらを重ね合わせるような感じで、目の前の子どもの心に自分の中の「子どもの心」を重ね合わせるようなイメージで、「相手の立場に立って想像してみる」ことが大切だと思います。

<p>Q 辛いことを抱えている子どもをどうやって救っているのか？</p>
<p>A 子どもが「辛い」と感じている問題・状況を“変える”ことができるときは、そのための調整や援助を行うこととなりますが、問題・状況を“変える”ことができないときは、“受け入れる”ということで乗り越えていくこととなりますね。このような場合は、教師は「解決請負人ではなく、共に悩み一緒に考える隣人」（立命館大学の春日井敏之先生の言葉）としてかかわることで、子どもが自ら乗り越えていくことをサポートするというかわりになるのではないかと思います。</p>
<p>Q 生徒から好かれる先生とは？ 良い先生とは？</p>
<p>A 難しい質問ですが、一つ言えるのは、生徒への確かなリスペクトの気持ちを持っている教師は、決して嫌われることはないように思います。イギリスの教育家のルーニーの、「最良の教師とは、子どもとともに笑う教師である。最悪の教師とは、子どもを笑う教師である。」という言葉に、私は感銘を受けました。</p>
<p>Q 人に教えるということについて大切な点は何か？</p>
<p>A 教科指導についてのご質問だと考えて、お答えします。ICTが普及した現在では、文章より音声や画像のほうが記憶媒体の多くの容量を必要とすることは誰でも知っていることですね。そのことについて、精神医学者の神田橋條治さんが、興味深いことを言っておられます。「一枚のCDに広辞苑一冊が収録できることは驚異であるが、広辞苑の、見出し20万語とその説明とからなる本文だけなら、CDの記憶容量の18分の1だけで足りるのだという。そして、広辞苑の中の2000枚の挿絵や図が約3分の1の記憶容量を使っている。さらに、60種の鳥の鳴き声の収録に3分の1を使っているのだという。本文は言葉による説明であり、挿絵はイメージであり、鳴き声は生の情報である。ここで重要なのは、それぞれを収録するのに必要なCDのスペースは、情報の量を示していることである。われわれは日常、言葉がとても濃縮された情報を伝達しているように感じている。それゆえ、内実の豊かな言葉を用いようと努める。ここに、われわれの錯覚がある。言葉はそれ自体としては貧しい情報なのである。言葉は、受け手の中にあらかじめ蓄積されている情報を引き出すアクセス・コードであり、それ自体の情報量は僅かである。その言葉に対応させた形で、受け手のなかに情報が準備されていない場合には、アクセス・コードは役に立たない。受け手にとっての未知の外国語はチンプンカンプンである。」</p> <p>前置きが長くなってしまいました。教科によって「大切な点」は異なると思いますが、社会科の教員であった私は、語句の説明よりも、「イメージが膨らみ、生の情報につながることを重視して、教材や授業展開を工夫していたように思います。ちなみに、皆さんの高校にも“授業の達人”がたくさんいらっしゃると思うので、ご質問の内容は先生方に聞いてみるのもいいかもしれませんね。</p>
<p>Q 教師から見た教師とは？</p>
<p>A 難問ですね…。もしも私が学校教育に携わっていなかったら、ひょっとしたら“胡散臭い職業”として教師を見ていたかもしれません。でも、実際に教職を30年間経験した中で出会った先生方のことを思い浮かべると、教師というのはやはり、自分のことよりも他者（児童生徒）のことを優先して考える、気高く尊い専門職であるというのが実感です。</p>
<p>Q 教師になるためには何をすればよいのか？ 教師になる前に経験しておくべきことは？</p>
<p>A 狭い意味では、教員採用試験（筆記試験・小論文・面接など）に向けた準備をするということでしょうが、たぶん、そんなことを質問されているのではないのでしょうか。漠然とした言い方になりますが、「教師になるために」という前提にとらわれず、興味のあること、関心のあることに精一杯取り組むことで、結果的に教師としての基盤も豊かになるような気がします。</p>

Q	教師になるために、一番辛かったこと、大変だったことは？
A	「教員に採用されるために」いちばん大変だったことは、教員採用試験に合格すること、「一人前の教師になるために」いちばん大変だったことは、小心（≡焦心、傷心）な性格のために、なかなか生徒をうまく叱ることができなかったことです。
Q	好きな教科を教えるべきか？得意な教科を教えるべきか？
A	私の場合は、受験学力として得意だったのは数学で、教職の専門教科として選んだのは社会でした。教師である限り教材研究は続けていくことになるので、「得意」よりも「好き」を優先した方がいいように私は思います。
Q	教師になってみて、思っていたことと違うと感じた点は？
A	生徒との関係づくりが、こんなにも難しく、また、うまく信頼関係が築けたときはこんなにも嬉しいものだという事は、教師になる前は考えていませんでした。
Q	教師をしていて感じるストレスは？ やめたいと思うときは？教師になって後悔したことは？
A	教師に対して反抗的な態度をとる生徒から暴言を浴びせられたりしたときは、そんな行動をとる生徒にもさまざまな背景があることをわかってはいても、やはり自分も人間なので、「情けない思い」「悔しい思い」がして、ストレスを感じる時がありました。でも、教師はよく「手のかかった生徒ほど忘れられない」と言いますが、私もそう感じています。“星の王子様とバラの花”の話しに出てくるように、自分にとってある対象が大切であるのは、その対象のためにどれだけの時間を費やしたかということに関係しているからかもしれませんね。ちなみに、やめたいと思ったこと、後悔したことはありません。
Q	教師として悲しかったことは？
A	何と言っても悲しいことは、教え子が若くして亡くなっていくことです。病気で、事故で、あるいは自殺も含めて、何人かの教え子が早逝してしまいました。「も一度会いたい…」「生きてさえいてくれたら…」と思うことがしばしばあります。
Q	教師として嬉しかったこと、楽しかったこと、教師になって良かったなあと思えたことは？
A	教師にとっての最大のご褒美は、同窓会での教え子との再会だと思います。懐かしい顔ぶれと久しぶりに会って、クラスのこと、クラブのこと、行事のことなどを語りあい、教え子から懐かしい気持ちや感謝の気持ちを伝えられるときが、教師にとっては至福の時間だと思います。
Q	教師をしていて感じるやりがいとは？
A	出会った生徒に対して、教師が何らかの影響を与え、生徒がその教師を「意味ある他者（大切な存在）」として感じてくれることに、教師はやりがいを感じるのではないかと思います。
Q	教師になっても、ずっと勉強をしなければいけないのか？
A	何らかの試験のための「勉強」ということで言うと、教員免許更新講習での試験や、管理職等になるための試験などがあります。ご質問の趣旨がそうではなくて、教養を深め自分を磨いていく広い意味での「勉強」についてであるのであれば、どんな職業でも「勉強」はずっと続くものでしょうし、特に教職は、対象となる相手（生徒）が変わっていくので、良い指導の一般解などなく、日々のかかわりの中でその生徒にとっての特殊解を求めていく「勉強」が不可欠だと思います。